十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉓2222
©十勝毎日新聞社 1992

宇宙開発最前線

☆☆2☆☆

日産自動車

月面車研究進める

固体ロケット開発もリード

ロケット・エンジンや素材の展示物を見学する視察団

日産自動車は昭和二十八年、宇宙航空事業部をスタート。三十一年、この川越に研究開発センターを開設した。敷地十一万平方㍍、同事業部約九百人中百五十人を抱える。

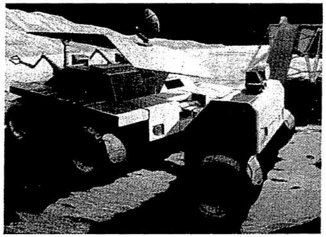
糸川英夫東大教授が日本初国産ロケット「ペンシル・ロケット」発射成功（昭和三十年）以来、ここ川越の研究開発センターは荻窪事業所（東京）、武豊事業所（愛知）と並んで、わが国の固体ロケット開発をリードしている同社の重要な拠点になっている。

宇宙利用に活路を

視察団を出迎えた二宮一芳所長は「ここでは当社が主力だった固体ロケットはもちろん、二十一世紀に向けて、空気吸い込み型（エアーブリージング）エンジン、人工知能、月面車も研究している。これからは宇宙の輸送面だけでなく、利用分野に活路を見いだす時代ではないか」と説明した。

技術員の案内で一行は、マッハ二—五のガスが流れるジェットエンジンの風洞実験設備、固体ロケットの燃焼試験設備を見学、最後に月面車として使える自律走行車を見た。

大きさは遊園地のゴーカート大、アヒルの首のようにセンサーがついたユニークな形。キャタピラーで動く仕組みになっている。センサーで前方の障害物を確認、内部のコンピューターで目標点から出発点のルートを探し、その通り走る仕組みだ。



月面車の想像図

実際に月面車妨害物認識装置でセンサーし、ルートを計算する場面を〝目撃〟した一行は、技術員から「近く走らせる予定です」という話を聞き、再びビックリした。

先端研究に感心

視察団の一人、田中敬二帯広市企画部主事は「毛利衛宇宙飛行士のスペースシャトル実験で宇宙への関心が高まっているが、先端を行く企業は、ロケットだけでなく、次のステップを目標にしているのがよく分かった。宇宙利用に欠かせない月面車の研究がここまで現実味を帯びているとは」と感心していた。

「宇宙利用はこれからのビジネスのキーワードになる。宇宙につながることで地域の可能性は広がるのではないか」。視察団はこんな思いを強くしながら次の目的地に向かった。

（つづく）

（小野寺　裕記者）

昭和31年に開設

埼玉県川越市は人口約三十万人。武蔵野台地の北側に位置するこの都市は戦国時代からの城下町で、サツマイモ、狭山茶で知られる。周辺にこれらの畑はあるが、街は工業都市として栄えている。

……＜メ　モ＞……

日産自動車株式会社　昭和八年創立。資本金二千三十三億六千万円、従業員数約五万五千六百人。売上高六兆四千億円。世界の自動車トップメーカー。宇宙分野ではNロケット、H1、H2ロケットの固体補助ロケットおよび上段モーターなど固体ロケット分野を担当している。

小林レンタカー
・ダンプ・ユニック・バン
0155
(56)
5858